英語前置詞 down と under の意味論[1]

――効果的な教育方法の試案――

花 﨑　一 夫　　花 﨑　美 紀[2]

キーワード：意味論　前置詞　認知言語学　EFL 学習者　モジュール型教材

１．はじめに

英語の前置詞の *down* と *under* は、一見するとほとんど同義であり、その唯一の相違点は、*down* がトラジェクターとランドマークの間の動的な関係を表すのが典型的であるのに対して、*under* はトラジェクターとランドマークの間の静的な関係を表すのが典型的であると思われる点である。以下の(1) (2)がそれぞれの典型例である。

(1) He went down the stairs.
(2) He went under the bridge.

(1)の *down* は動的な意味（下る）を表すが、(2)においては、*went* は移動を表しているものの、*under* は下への移動を意味しておらず、*under the bridge* で船などが通った場所を表しているだけであり、トラジェクターとランドマークの間の動的な関係を表しているとは言えない。

しかし、事態はそれほど単純ではない。もし前置詞 *down* が下への移動を表すとするならば、どうして(3)において *he*（彼）が *road*（道）の下に移動することを意味しないのか。一方、同じような文脈で前置詞 *under* を使った場合には、例えば(4)のように、*he* が *road*（道）の下を歩くことを意味するのはなぜなのかという疑問がわく。さらには、*up* や *down* が上方あるいは下方への動きを表すとするならば、どうして例えば(5)の *up* はライオンが上方へ移動することを意味しないのかという疑問も出る。

(3) He walks down the road.
(4) He walks under the road.
(5) He shot the lion up/ down.

これらの疑問に答えることは、英語の前置詞を的確に学習者に習得させるためにも重

要であると考えられる。以上の観察を出発点として、本稿では以下の(6a, b)の２つの問題に対する答えを提示すると同時に、*down* と *under* のような機能語の用法を、大学の英語教育において、授業時間外の学習を通じて、英語学習者にどのように習得させるかに関する試案を提示することを目的とする。

(6) a. *down* と *under* のもつ意味は何か
b. 前置詞はトラジェクターとランドマークの間の静的な空間関係を表すだけなのか、あるいはトラジェクターとランドマークの間の動的な関係をも表すのか

2. 理論的枠組みと方法論

本論文では、*down* と *under* の意味的な相違を分析するために認知的なアプローチを採用する。というのも、次節で概観する Brugman (1985) 流の分析が、機能語である英語前置詞の意味の記述に成功してきたと言えるからである。また、本論文では、Tomasello (2003) が「用法基盤アプローチ」と呼ぶ方法論、すなわち、最初に言語データを収集し、次にそのデータを分析することを通して問題となる言語データを抽象化して捉える方法を採用する。具体的には、COCA などのコーパスからデータを収集し、問題となる２つの前置詞 *down* と *under* の意味的な相違点を見ることにする。このように実際に日常的に使用されている言語データを分析に用いることで、実際に２つの前置詞がどのように使用されているのかについて深く理解することが可能になるわけである。

3. 前置詞の意味研究に関する先行研究

一般的に前置詞は「機能語」であり、名詞などの「内容語」と比較すると「意味を持たないもの」で、意味論の歴史のなかではあまり採り上げられなかったという経緯がある。(Jackendoff 1973) ところが、Brugman (1985)や Lakoff (1987)による前置詞 *over* の研究以来、前置詞が脚光を浴びるようになり、前置詞研究が以前に比べてさかんになってきた。

前置詞に関する先行研究は大きく３つに分類できる。一つ目は、単語の持つすべての意味を列挙する辞書学的な方法、２つ目は、すべての意味を家族的類似性という観点から関連付ける方法、３つ目は、意味はディスコースによって使用場面に応じて与えられるものであるとする考え方である。以下、順番に概観することとする。

3.1. 辞書学的なアプローチ

日本の英語学習者が使用している英語の辞典やテキストのほとんどは、この範疇に入る。例えば日本でもよく使われている英英辞典の Cobuild は、*down* の 16 の用法と

under の 12 の用法を羅列している。

このようなアプローチを採用しているのは辞書だけではない。安藤 (2012)、Atkins and Rundell (2008)、Mikker and Leacock (2000)なども この範疇に入る。例えば安藤 (2012)は著作の中で、*down* と *under* の用法を列挙している。このような傾向は、日本で出版されている英語の文法書などにも一般的に見られるものである。

このアプローチは、日本の英語学習者にとって、前置詞のすべての用法を網羅的に把握できるという点において、学習に役立つと言えなくもないが、一方で、学習者が当該前置詞の用法を習得する際には、列挙されている用法を暗記せざるを得ないことになり、結果として学習者の負担を増やすことにつながり、最終的に前置詞の用法を効率的に習得できないことになってしまう恐れがある。したがって、このアプローチは、英語学習者にとって望ましいものであるとは到底言えないであろう。

3.2. 家族的類似性の観点から意味ネットワークを形成するアプローチ

レイコフらの前置詞 *over* に関する一連の研究は、言語学において重要な意味をもつ研究であったと言える。というのも、彼らの研究は、以前は「意味のない」品詞として研究の対象とはされていなかった前置詞に光を当て、機能語と呼ばれる前置詞も、内容語と同様に独自の意味を持つものであると主張したからである。また彼らは、Wittgenstein (1953) が提唱した家族的類似性という概念を意味論の分野に導入した点においても画期的であった。ヴィトゲンシュタインは、カテゴリーというものは典型的な代表例とそうでないメンバーによって構成され、後者は「家族的類似性」を通して典型例と関連付けられると主張している。これは、カテゴリーというものを必要十分条件で定義する従来のやり方とは一線を画するものである。この考え方を意味論の分野に導入したレイコフらは、単語もまた「典型的な」意味をもち、その単語のその他の意味は、家族的類似性、すなわちメタファーを通して関連付けられると主張した。彼らは、*over* のもつ意味ネットワークを以下の図１のように表した。

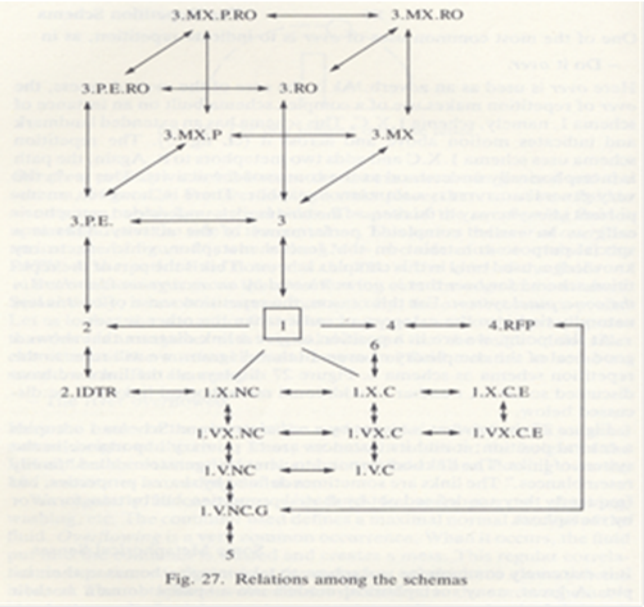


図１：*Over* の意味ネットワーク (Lakoff 1987)

レイコフらの研究に続く形で、意味ネットワーク理論を活用した前置詞研究が多く行われてきた。

しかしながら、前置詞の意味に対するこのアプローチも批判をまぬかれることはできない。少なくとも以下の３点をこの方法論に対する欠点として挙げることができる。一つ目は、プロトタイプをどのように決めるのかがはっきりしないこと。すなわち、プロトタイプは、用法の頻度で決めるのか、英語使用者の頭の中に真っ先に思い浮かぶ用法なのか、あるいは、歴史上、一番初めに出現した用法なのかがはっきりしない。そして、このやり方で決められるプロトタイプは一つに定まらないことがあるのも問題である。二つ目は、当該の前置詞が使用されている「文脈」に注意が払われていない点である。例えば、Brugman (1981, 1985) は、*The plane flew over the city* と *Hang the painting over the fireplace* に出てくる *over* は、前者が動的な意味を持っているのに対して、後者は静的な意味を持っていると主張している。しかしながら、一見すると動的と思われる前者の *over* は動詞 *fly* の持つ動的な意味に由来し、後者の *over* の静的な意味は、動詞 *hang* の静的な意味から生じていると主張することが可能である。それゆえ、前置詞の意味を議論する際には、それが使用されている文脈により注意を払う必要があることは明白である。そして最後の三つ目は、意味ネットワークはどのようにそれぞれの意味が関連しあっているかを示してはいるものの、どうして図で示されるような意味拡張をしたのか、その理由が定かではない。すなわち、前置詞のもつそれぞれの意味をネットワークのどこかに位置づけはするものの、そもそも当該の意味がどのようなプロセスをへて生じたのかを説明することができない点が欠点となっている。また、意味拡張によって様々な用法を説明しようとすると、本来はありえないような意味も理論上は生じることを予測してしまう点も欠点として挙げられる。例えば前置詞 *down* の場合、このアプローチを採用すると、*going down the road* がどうして *"going underneath" the road*（道路の下を行く）の意味にならないのかに関して妥当な

説明を与えることができないし、*shot the lion up/ down* についても、文字通りにライオンが撃たれた結果、上/ 下へ移動するという意味を阻止することができないということになってしまう。

3.3. ディスコース面からのアプローチ

このアプローチの代表例は Tyler and Evans (2003)である。彼らは前置詞 *down* と *under* の中核的な意味をそれぞれ図２と図３で表した。

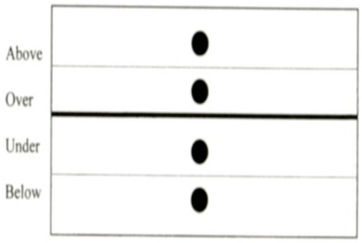


図 2 *Under*
(Tyler and Evans 2003: 130)

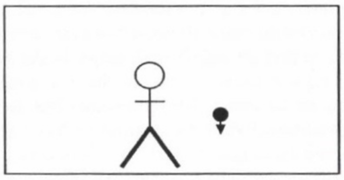


図 3 *Down*
(Tyler and Evans 2003:142)

彼らは、*under* は *above* と *over* と対照的な関係にあり、*under* はランドマークの下方に位置するという意味を表しているとした。一方 *down* は、動きを示しておらず、図３に示すように、人間の体で言うと下のほうをプロファイルしており、矢印で示すような方向性を備えている。（ただし、この矢印は動きを表しているわけではない。）

さらに彼らは、中核的意味以外の意味を想定するべきではないとし、一見したところ様々な意味があるように思われるのは、当該前置詞が使用される文脈において、前置詞以外の他の語との相互作用を通して、その都度、適切な解釈が定まることにより、多義的に見えているだけであると主張する。例えば、彼らはレイコフらとは違って、*She lives over the bridge* のように、一見すると動きがあると思われるような *over* の用法は、人間は文字通りに橋の上に住むということはないという一般常識と、橋によってできた道の上を移動する視線によって生まれるものであると考えるわけである。

このようにそれぞれの語に１つの中核的意味を想定する考え方は、学習者の負担を軽減するという意味において、EFL 学習者にとって便利な方法である。しかしながら、前置詞が使用される文脈が意味の決定にどのようにかかわるのかについては、さらなる説明が必要であり、語の持つ様々な“意味”から中核的な意味を抽出することは、非常に抽象的な意味を取り出すことになってしまうことになる可能性もはらんでいるので、このあたりも含めてさらなる考察が必要になってくる。次節以降では、*down* と *under* をどのように分析すればいいのかについて考察を加えることとする。

4. 観察

我々は代表的なコーパスである COCA を調べたところ、*down* の用例を 30166、*under*

の用例を 11754 見つけた。表１がこれらの２語の前に来る動詞の種類とそれぞれの用例数を示している。

down (30166)	both	under (11754)
walk (4293)	go (2653,427)	be (2942)
run (1968)	come (1941,976)	fall (862)
shut (1947)		operate (495)
break (1264)		live (425)
bring (1199)		hide (371)
put (1150)		work (311)
turn (1052)		drive (285)
look (969)		stand (268)
roll (788)		get (222)
take (680)		sit (222)
slow (669)		do (191)
start (456)		bury (178)
cut (436)		place (167)

表１ ：down/ under と共起する動詞とその用例数 (Hanazaki and Hanazaki 2018: 29)

表１をみればわかるように、*down* は、*walk*（歩く）、*run*（走る）、*shut*（閉じる）など、運動を表す動詞と共起していることが多い。これに対して *under* は、*be*（いる、ある）、*live*（住む）、*hide*（隠れる）など、静的な位置を示す動詞と共起することが多い。したがって、*down* は動きの意味を持つのに対して、*under* には動きの意味はないと主張することが妥当であるように思われがちである。すなわち前者は、トラジェクターのランドマークに対する動的な移動を表し、後者はトラジェクターが動かないことを示しているとする見方が生まれるわけである。

しかしながらこのように単純に事態を捉えてしまうと、少なくとも以下の２つの問題に対する適切な解答を与えることができない。第一に、どうして *down* と *under* はどちらも動詞 *go/ come* と共起できるのか。*Go down* も *go under* も動きを表していると思われるので、これは上記の観察と矛盾してしまう。第二に、第１節で指摘したデータ (3) (4) (5)に関する疑問にどう答えるのか。

したがって以下では、*down* と *under* の相違点を明確にすることにする。表２は２語の相違点をまとめたものである。

Down		*Under*
Adverb → prep	**adverb**	rare
・verb *downed the opponent* ・adj. *down escalator* ・n. *ups and downs*	**other categories**	・adj. *under jaw*
	special prep.	protasis *under such condition* prefix shortage: *understate* below: *underline*
from OE *descend from hill*	**etymology**	from OE *close to PDE*
come from down the hall	**prep +prep**	*from under the bed* (COCA)
NA Locative Inversion :*Down the falls flows the little brook* *(Hayano 2014: 15)*	**prep sub.**	OK *Under the bed is a favorite place for cats* (Iwasaki 2007:114) *Under the bed is where we used to hide the keys* (Huddleston +Pullum 2002: 64)
Up (but not completely)(Otani 2013)	**antonym**	*over* (Benesse 2003)

表２：*Down* と *Under* の相違点 (Hanazaki and Hanazaki 2018:29)

文法範疇に関して言うと、*down* は副詞、動詞、形容詞のいずれとしても使われているのに対して、*under* はそのような用法は見られたとしてもかなりまれである。この点において、*down* は *under* よりもより文法化が進んでいると言うことができるが、*under* は *under such circumstance* のような決まったフレーズの一部として、あるいは、動詞の接頭辞として使われることが多い。また、どちらの語も前置詞+前置詞という組み合わせの中に生じることができるが、主語位置に前置詞句が来る構文においては、*Under the bed is a favorite place* のように、*under* しか生じることができない。

これらの相違点は、*down* が動的な意味を表すのに対して、*under* は静的な意味を表すという観察と何の関係もないように思われる。次節では、さらに注意して今まで観察したデータを分析し、２つの語の相違点を明らかにすることを試みたい。

5. 考察

このセクションでは、観察したデータを詳細に分析し、*down* と *under* の意味的な違いを明らかにすると同時に、(6b)の問題、すなわち、前置詞はトラジェクターとランドマークの間の静的な関係のみを表すのか、あるいはトラジェクターとランドマークの間の動的な関係をも表すことが可能なのかに関して答えを出すことを試みたい。

表２によれば、*down* と *under* は以下の３つの点が主な相違点になっている。第一に、*down* は前置詞としてのみの用法だけでなく、他の品詞として使われる点である。第二に *under* のほうが *down* と比較して決まったフレーズの一部として使われることが多い。そして第三点目として、*under* は主語としての前置詞句の中に生じることが可能になっている点が挙げられる。

以下のサブセクションでは、*down* と *under* の違いを明らかにするために、それぞれの語の反意語と思われる語、*up* と *over* を採り上げ、*down* と *up*、*under* と *over* の２組を考察したい。

5.1. Down の意味

はじめに、down と up を比較してみよう。

(7) a. look down
b. look up

(7)の最小対を見ると、*down* は下方への動きを表し、*up* は上方への動きを表していると言いたくなる。しかしながら、以下の(8)（9)の例を見ると、この考え方は正しくないことを示しているように思われる。

(8) a. They shot the lion down.
b. They shot the lion up.
(9) a. He came down to me.
b. He came up to me.

すでに指摘したように、(8b)はライオンが上方へ移動したことを意味しないし、(9b)は彼が上方にいる私のところに来たことを意味するわけではない。次に *down* についてであるが、下方への動きが関係していると思われがちだが、それが意味として出てくるのは *down* が使われている文脈からであると考えるのが妥当である。別の言い方をすると、*down* は、文脈によって含意される行為が行われた後に空間の低いところを占めている位置を示しているだけであるということになる。というのも、*down* は行為動詞のみならず、*be* 動詞のような状態動詞と共起するからである。

我々の主張が妥当であることを明白にするために、*down* の副詞的な用法を見てみることにする。以下の(19)はオックスフォード現代英英辞典 (以下、OALD) からの引用である。

(10) a	<towards / in lower place>	the sun started to go down
b.	<to a low level>	keep the noise down
c.	<in a weaker position>	he was down with the flu
d.	<into writing>	the numbers down carefully
e.	<money payment made initially>	pay ￡5 down

f. <American football>　　　　　　　　touch down

(10a)、(10d)、(10e)と(10f)の *down* は、行為動詞と共起しているが、(10b)と(10c)は状態動詞と共起している。しかしながらよく観察してみると、(10b)においては、努力しないとノイズのレベルを上げないでおくことはできないわけで、何らかの行為をすることでノイズのレベルを下げた状態に保っていると言える。(10c)においては、通常の状態では *down* ではなかったが、病気のために通常の倒れていない状態から *down*（倒れた）状態になったことを意味していると考えられる。つまり、これらの例においては、直接的な行為への言及はないが、*down* を含むフレーズによって描写されている状態は、何らかの変化が生じた後の状態を表し、それが空間において下方を占めていることになる。

このように考えると、(3)の例にも妥当な説明を与えることができる。すなわち、(3)における *down* は下のほうへもぐる動作を含意するのではなく、移動後の離れた位置を *down the street* で表していると説明できる。このことは(11)の例からも確認することができる。

(3) go down the street

(11) a. <nearest to the sea>　a dozen miles down the Thames

b. <throughout>　astrologers down the ages (Hanazaki and Hanazaki 2018: 31)

もし *down* が下方への移動を表しているとすると、(3)や(11a, b)は意味をなさないことになるが、*down* を含む前置詞句が心的走査の後の最終状態を表していると考えれば、(3)や(11a, b)のデータを適切に説明できることになる。

我々の議論が正当性は、以下の(12)のデータを見るとさらに強化されることになる。

(12) ups and downs

当然ながら、(12)は上方、あるいは下方への動きを含意しているのではなく、経済状態や気分が高い位置と低い位置にあることを示しているわけで、動きではなく、静的な位置を表しているわけである。

以上の観察から、結論的には、*down* は下方への動きを含意することはなく、行為や変化が生じた後の最終状態を表している、言い換えれば、トラジェクターとランドマークの間の静的な空間関係を表していると考えるのが妥当ということになる。

5.2. Under の意味

第４節で見たように、*under* は *down* と比較すると主語位置に来る前置詞句の中で使われるという点が特徴的である。

(13) Under the bed is a favorite place for cats. (Iwasaki 2007: 11)

(14) Under the bed is where we used to hide the keys. (Huddleston and Pullum 2002: 64)

一般的には、*under* は下の空間を示すとされている。Tyler and Evans (2003) による図２や Benesse (2003) による図４がその代表例である。

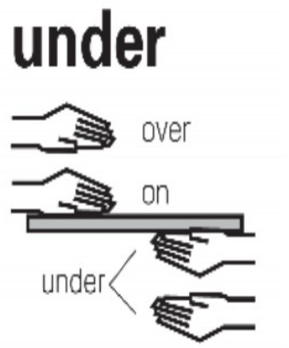


図４Under のイメージスキーマ

しかしながら、図２や図４で表される *under* が示す空間は、あまりにも漠然としていて明確であるとは言い難い。図２では、*under* と *below* をどのように区別していいかはっきりしないし、図４からは、ランドマークの下にあるものは何でも *under* を使って表現することが可能なような印象を受けてしまう。したがって、以上の問題を解決するために、本稿では、*under* は以下の図５のように、典型的には周囲を囲まれたと見なすことのできる空間のなかにモノがある場合に使えると考える。[3]

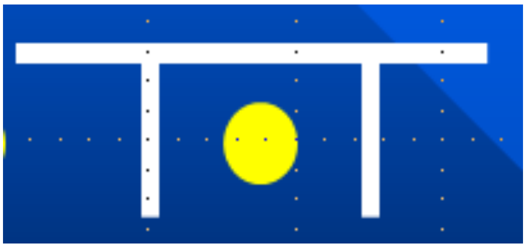


図５ Under のイマージスキーマ

我々の主張がより妥当であることは、以下の図６をみるとわかりやすいであろう。

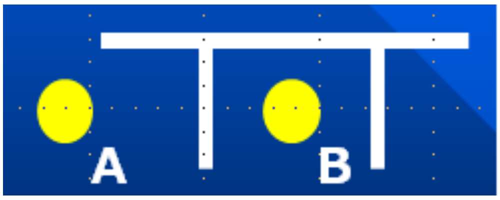


図６Under には制御者（コントローラー）が必要[4]

図６においては、A の位置にあるボールは *under* を使って表現することはできない。あえて表現するなら below を使うことになるであろう。一方、ボール B は under を使って表現するのがふさわしい。すなわち、*under* を使って表現できるのは、モノが機能的に周囲と区別できる限られた空間のなかに入っている場合である。図６のテーブルとボールの位置関係を表した図で具体的に説明すると、ボール B はテーブルを上から見た場合には、天板から隠れる位置にあり、周囲にはテーブルの脚がある空間に囲まれた中に位置していることになる。つまり、*under* には制御者（テーブル）と被制御者（ボール）があるということになるわけである。

Under によって表される空間には制御者と被制御者がかかわり、この両者の間には力関係が存在していると議論することによって、OALD に掲載されている以下の用法にも自然な説明を与えることが可能になる。

(15) a. <directly below>	under the North Sea
b. <lower level than>	the room under his study
c. <lower than>	under 18
d. <controlled>	under his spell
e. <undergoing, in the state of>	children under difficult circumstances

(15d)と(15e)の例においては、トラジェクターがランドマークのいわば支配下にある状態を表している。(15d)では彼の魔法、(15e)では難しい状況の支配下におかれていると考えられる。(15a, b, c)の例は一見したところ、制御者が関係しているか判断が難しいが、例えば(15b)は、彼の書斎から何らかの影響を受けている部屋を表す場合などを言い表すことが可能であることから、制御者が関与していると考えて差し支えないであろう。

このように、制御者、被制御者そして両者間の力関係を想定すると、以下のような副詞的な *under* の数少ない用例に対しても妥当な説明を与えることが可能になる。

(16) 副詞的な *under* の用法

a. <directly below>	weaving the body through crossbars, over and under
b. <under water>	he was floating for some time but suddenly went under

(16a)は想定される文の主語が、障害物の影響を回避しながら進んでいく様を表しており、間違いなく *crossbars* が制御者の役割を果たしている。また(16b)においては、主語の *he* が水圧によって制御を受けた被制御者になっているという説明が可能である。

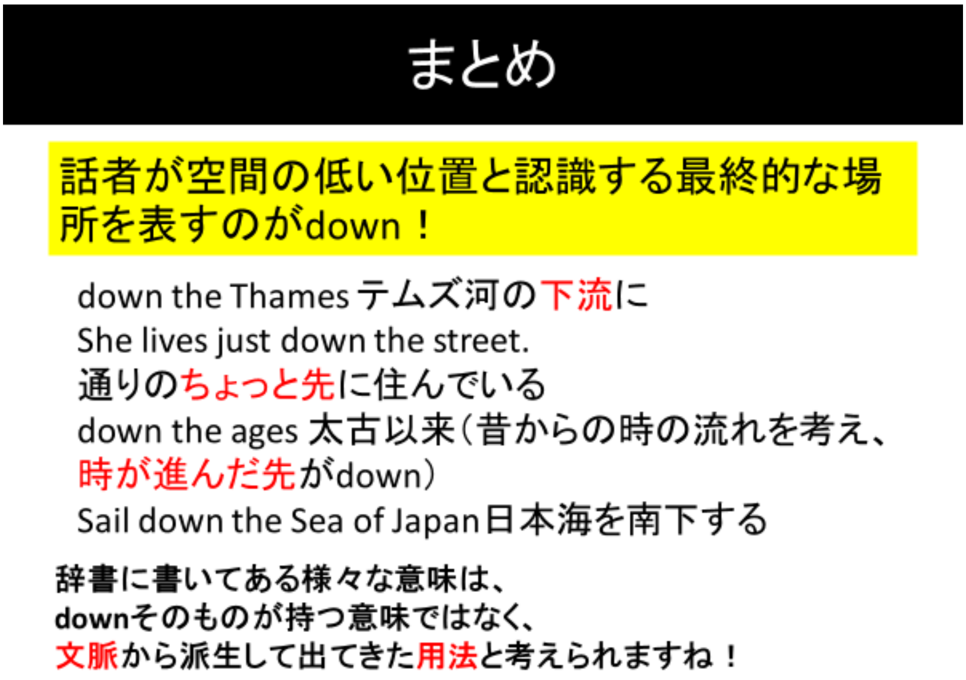
最後に、このセクションの冒頭で紹介した前置詞が主語の位置を占める構文についてであるが、主語位置に前置詞句をもってくるということは、それによって表される場所はあいまいな場所では都合が悪いわけで、明確に定められた場所を表していることになる。これは、我々が主張する *under* の意味と整合性があることを示している。

以上の議論から、*under* の示す空間は、制御者、被制御者そして両者の間の力関係が関係する限られたスペースを表していると結論付けることができる。

次節では、これまでの議論を踏まえ、*down* と *under* のふるまいを効果的に学習することを可能にするモジュール教材の一部を紹介し、授業時間外における前置詞の効果的な学習方法に関する試案を述べることにする。

6. Down/ under に関するモジュール教材

筆者らは、従来から、英語学習者が授業外でも自学自習できることを目的とした自学自習用教材を、重要な文法項目ごとにモジュール型教材として作成し、それを大学における英語教育に活用している。作成した教材は授業外で自由に活用できるよう、信州大学の e-Learning 学習のポータルサイトの e-ALPS 上に掲載し、学生が必要な時にはいつでもダウンロードし、学習に取り組めるようになっている。このモジュール型教材は認知言語学の知見を応用し、学習者の「なぜ」という疑問に答えるように配慮されており、従来型の英文法の教材とは一線を画したものになっているのが特徴の一つである。このような流れの中で、前節までの考察を活用し、我々は前置詞 *down* と *under* に関してもモジュール型教材を作成し、英語教育の現場で活用するようにしたわけである。以下が *down* のモジュール教材の抜粋である。



この *down* の教材例からもわかるように、我々の作成するモジュール教材は、どういう場合に *down* が使われるのかが外国語として英語を学習する者にも一目でわかるように工夫されている。そのために学習者は用例を暗記するのではなく、理解することができるわけである。このように理解されて得られた知識というのは、暗記によって得られた知識と比較してより定着しやすいということは、Hanazaki and Hanazaki (2015)の研究からも明らかになっている。したがって、我々としては、今後もこの方針に基づいてモジュール型教材の作成を続けることが大学の英語教育にとっても重要であると考える。

7. 結論

本稿は以下の２つの問題を議論することから出発した。

(6) a. *down* と *under* のもつ意味は何か
　b. 前置詞はトラジェクターとランドマークの間の静的な空間関係を表すだけなのか、あるいはトラジェクターとランドマークの間の動的な関係をも表すのか

COCA などから引用したデータを使い、用法基盤アプローチの観点から分析を行った結果、*down* と *under* については以下のような分析をするのが妥当であるという結論を出すことができた。

(17) a. *Down* は下方への動きを表しているのではなく、行為や変化が生じた後の

最終状態が空間の低い位置を占めていることを *down* で始まる前置詞句にが表している。一方、*under* で始まる前置詞句は、制御者、被制御者そして両者の力関係がかかわる限られた空間を表す。

b. *Down* と *under* については、どちらも空間における静的な場所を表している。

そして、このような結論をもとに、我々は前置詞 *down* と *under* に関するモジュール型教材の作成を行ったわけだが、英語学習者がなるべく負担の少ない形で前置詞 *down* と *under* の用法を習得できる可能性が高まったと言えよう。というのも、我々の作成するモジュール型教材は、認知言語学の枠組みを援用して作成されており、当該の言語表現がなぜ使われるのかについて、学習者にわかりやすい形で示しているからである。学習者に丸暗記などの負担をかけない教材に仕上がっているからとも言うことができる。本稿では前置詞の *down* と *under* についてのみを扱ったが、今後も科学研究費助成事業の支援を受けつつ、機能語のうち、接続詞まで扱う範囲を拡大し、その知見を利用してこのようなモジュール型教材の作成を続け、EFL 学習者の英語運用能力を高めていくことを追求したいと考えている。

---

[1] 本稿は、The 11th International Conference on Language, Education, and Innovation で発表した論文、"The Semantics of Words that Denote Lower Places or Movements toward such Lower Places" をベースに、教材の紹介とその分析を中心に加筆修正を加え、日本語で執筆したものである。本研究は、JSPS 科研費基盤研究（C）の課題番号 18K00779, 16K02761, 16K02917 の助成を受けた研究である。また、杏林大学外国語学部の八木橋宏勇氏からは執筆の過程で貴重なコメントをいただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

[2] 花崎　美紀は法政大学情報科学部に所属。

[3] Stay under the roof の場合、必ずしも屋根の下に物理的な囲いはないかもしれないが、屋根があることで雨に濡れないような場合には、屋根の恩恵を受けて雨から守られている、すなわち屋根が人を濡れない状態にたもっていると考えられる。これは、機能面から考えると、屋根の影響がある空間とそうでない空間の間には、目に見えない場合でも「囲い」があるとここでは考えることにする。

[4] コントローラーが必要というのは、注３で述べた屋根と同じような役割を果たすことが必要ということである。具体的には、テーブルの上から見ると、天板があるためにボールが隠れるようになっている状態を示している。

参考文献

1. 安藤貞雄. (2012)『英語の前置詞』開拓社
2. Atkins, B.T.S and M. Rundell. (2008) *The Oxford Guide to Practical Lexicography*. New York: Oxford, University Press.
3. Benesse Corporation (2003) *E-gate to English*. Tokyo: Benesse.
4. Brugman, C. (1981)　*Story of Over*.　master thesis, UC-Berkeley.　Berkeley, California.
5. ----- (1985) *The Story of Over: Polysemy, Semantics, and the Structure of the Lexicon* (Outstanding Dissertations in Linguistics).　London: Taylor & Francis.
6. Dirven, R. (1993) "Dividing up physical and mental space into conceptual categories by means of English prepositions" in C. Zelinsky-Wibbelt ed. *The Semantics of Prepositions: From Mental Processing to Natural Language*.. Berlin: Mouton de Gruyter. pp. 73-97.

7. -------- (1995) "The construal of cause: The case of cause prepositions" in J. R. Taylor and R.W. KacLaury eds. *Language and the Cognitive Construal of the World*. Berlin: Mouton de Gruyter.
8. Hanazaki, M. and K. Hanazaki (2015) "Teaching Prepositions to Japanese EFL College Students: Bridging Theory and Practice," *International Journal of Language Education and Applied Linguistics, Vol 13*: 1-10.
9. Hanazaki, M. and K. Hanazaki (2018) "The Semantics of Words that Denote Lower Places or Movements toward such Lower Places," *Proceedings of the 11th International Conference on Education and Innovation (ICLEI) Singapore*, 2018, 25-35.
10. Huddleston, R. and G. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Languag*e. Cambridge: Cambridge U.P.
11. Iwasaki, H. 2007. "On the Prepositional Subject Construction", *Tsukuba English Studies* 26. pp.109-126.
121. Jackendoff, Ray (1973) "The Base Rules for Prepositional Phrases" In S. Anderson and P. Kiparsky (eds.) *A Festschrift for Morris Halle*. Holt, Rinehart and Winston, New York. pp 345-356.
13. Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind.* Chicago: University of Chicago Press.
14. Miller, G. A. and C. Leacock (2000) "Lexical representations for sentence processing", in Yael Ravin and Claudia Leacock (eds) *Polysemy: Theoretical and Computational Approaches*. Oxford: Oxford U.P. pp.152-160.
15. Otani, N. (2013) *A Cognitive Analysis of the Grammaticalized Functions of English Prepositions: From Spatial Senses to Grammatical and Discourse Functions* Tokyo: Kaitakusha.
16. Tomasello, M. (2003) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Boston: Harvard University Press.
17. Tyler, A. and V. Evans (2003). *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge: Cambridge U. P.189.
18. Wittgenstein, L. (1953) *Philosophical Investigations*, Blackwell, Cambridge, MA.

データソース
COCA: Corpus of Contemporary American English available at https://corpus.byu.edu/COCA/
OALD: Oxford Advanced Learners' Dictionary
Cobuild

（花 崎　一 夫　信州大学　全学教育機構　准教授）
（花 崎　美 紀　法政大学　情報科学部　教授）

2019 年 1 月 8 日受理　2019 年 3 月 5 日 採録決定